

唯識と現代心理学を行で媒介した人——笹本戒浄上人

佐藤幸治

東洋では身心一如の調整を中核として宗教・医学・哲学・心理学・芸道（いわゆる芸術と武道などを広く含めて）等が密接に結びつき、その間に何百年何千年の人間に関する知恵が集積されている。これらの知恵の中にはまだ科学的に研究され、説明されたものでないとしても、決して非科学的とはいえない、貴重な長年の経験による発見がさうとう多く潜められている。これを西洋に発達した新しい科学と対面させ、その間の人間性に関する知恵を解明することは新しい時代の世界の人々の幸福のためにも貢献するところ少なくないものがあると思う。

東洋の知恵と西洋の科学を統合しようとした人は各方面に見られると思うが、われわれの心理学の領域では、第一に日本心理学の草分け、初代の東大心理学教授元良勇次郎

博士（一八五八—一九二二）をあげることができる。元良博士は稀に見る体系的心理学者で、米国に留学、ジョンズ・ホプキンス大学のスタンレー・ホールの下で学位をとった人だが、夏目漱石と二人で釈宗演を訪ね、漱石は続かなかつたが、博士はとにかく一週間熱心に参禅、そうとうの所得があつて、われわれの心の本然の姿は、従来の西洋の心理学が考えてきたような觀念の集まりではなく、むしろ明鏡止水のようなものであることを確認し、一九〇五年（明治三十八年）ローマの万国心理学会議で「東洋における自我の觀念」と題して、革命的な所見を公にしているのである。しかし東洋の心理学に興味を寄せた人はその後、比較的少なかった。

その間においてむしろ例外的に東洋心理学に関心を寄せられ、そうとうの研究を發表されたのは東北大名誉教授千葉胤成博士（一八八三—一九七二）、故京城大学教授黒田亮博士（一八九〇—一九四七）等である。黒田博士は『勸の研究』（正統）、『支那心理思想史』『唯識心理学』等の著作で知られているが、東洋心理学三部作の第三として『禅の心理学』をも計画しておられたようである。非常に熱心な方で唯識の勉強のためには京城からわざわざ何回か法隆寺まで受講に来ておられる。ただ残念なことに行を通じて理解しようとされなかつたところに、鈴木大拙博士から「せつかく、那な一点いっけん」と云いながら禅の那一点を把んでいない」と指摘されるような弱点を残しており、これは氏

の『唯識心理学』も通常の唯識研究書以上に殆んど出ていないという結果を招来している。その点、唯識と現代心理学とを行を以て媒介きざし、新しい解明の道を開いたのは、光明会の指導者、笹本戒浄上人（一八七四―一九三七）だといってよい。

笹本戒浄上人は明治七年、東京に生をうけられた。旧姓は河田、笹本家に養子にゆかれたのである。浄土宗本校から第四高等学校へと進まれ、ついで東京帝大で心理学を専攻せられた。元良勇次郎教授の下で研究されたが、唯識に関しては、かえって恩師元良博士に講ずるところがあったという。

昭和三十三年（一九五八）、JPA（日本心理学会）の総会において千葉胤成博士は、東北大心理学研究室昭和三十四年発行「大脇義一教授在職三十五年記念心理学論文集」収録の「笹本戒浄『成唯識論の心理説』について」を朗読して、笹本上人の心理学研究の業績を紹介された。笹本上人は心理学者であるばかりでなく仏道修行に精進され、数少ない高僧の一人として知られた方である。

本書『真実の自己』は上人の弟子の方々が数年間にわたって、細心の注意と努力を払って、上人の講演をノートして集録したものである。私は上人の講演は、禅浄二門の修行に熟練し、かつ心理学への造詣深い上人が、一般人を対象としてなさったものであるから、これまでの禅哲学の大家の抽象的論述に失望を感じているかもしれない西洋の人

達にも、お上人の説明はかえってよく理解されるであらうと信じている。

(京都大学教授・文学博士)

——世界的心理学雑誌『プシコロギア』第四卷二号『大法輪』三〇卷七号より